



かなにおぼれて



葉

しぜん

艶やかに涙を見せて、青空。
くらくらとする足下に眠れ、大地。

喉に流れる君は、歌声。するすると昇れ、このメロディ。

紫色の爪が、光の中に浮かぶ。
陽光に、肌の輪郭がぼやけて、存在は不確かに。

(私はどこだろう)

そんなことを考えながら、水面に探していたのは、あなたの面影でした。

しとしとと雨ながれ、ゆるやかな傾斜に裸足で降り立った。

のぼせていく体温に身を任せ、仰いだ夢に、流れ星。

鼻の先に零れた、誰かの涙。

積もり積もって、世界を濡らす。

土になって。

全てを受け入れ、包んであげられたら。

丸くなって。ただ、背を丸めて、くう、ともうん、とも言わないで、のんびり、ゆったり、おやすみなさい。

私たちは、少し、我がままみたい。

猫たちは、おやすみ、も口にしないで、眠りに落ちるのに。

私たちは、少し、欲張りみたい。

猫たちは、ひたすら寝るだけで、幸せなのに。

傲慢ちきな、忙しいことが大切だと思う私たちは、ちょっとだけ、猫を先生。って呼んでも、いいのかも知れない。

生きる先生。

静かに教える、せんせい。

目蓋、とろり、とろ、り。

目の蓋、なんて面白い名前。スライド式に瞳を覆って、瞬きがいち、にい、さん。ほら、またたく間に世界は変わってぐるりとその場を一周すれば三百六十度のパノラマ。

開いていると鮮やかなものが信号となって脳でちかちか輝くけれど、閉じているとそれはそれで他の器官が敏感になって、子猫の欠伸も、遠いしゃぼんだまの匂いも、ぜんぶが届いてくる。

眠っている間なんて、もっともっと不思議じゃない。

つむっているのに、夢の中で、私はひたすら目を開く。声は聞こえてないのに、何を言っているのか何故だかわかる。

見たことのないものが歩き回って、どこかノスタルジックな空が、まぶしくて目を凝らす。太陽に手をかざすと、指とゆびの隙間がグレープフルーツ色に透けて、これまたきれい。

今日もお仕事お疲れさま。

私はまた、目蓋のつくる境界線で踊っているわ。

見えなくなるのに、鋭くなる。魔法になる。

そんな世界を、夜毎、あじわう。

およいで、ゆくの

優しさに埋もれて、わたしは深海魚になる。
息が苦しくなって酸素を吐き出した。肺を満たす、心臓の音。とくり、とくり。

海底で空を見上げる。目を凝らしても、まっくらやみからは遠い、太陽に揺れる水面。
不思議な形のおおきな魚に乗って、少しだけ遠くへ行った。

酸化しきれずにぬめってしまった、大きな船。座礁したくじらのように、力つきて、佇んで。
その影に生きるきらきらひかる動物たち。骨だけが残った、ひとの体のかけら。

船体を指先でなぞった。
ねっとりとした緑色は、ぎゅうと中指に集まったのだけれど、すぐに溶けてなくなってしまった。

ひとこいしい。

蒼い優しさに、声すら失ってしまったのだろうか。
ただ単に酸素がなくて、音が届かないだけなのか。

つめたい水が、肌を包む。

ひとは、どこへ。